

徒然草

日本留学～母国への貢献を目指して～

中野恭子

JICA 国際協力専門員

近年、高等教育協力事業、とくに留学受入れプログラムに増加がみられる。留学受入れのゴールは、帰国生やその教え子たち、後輩たちが、それぞれの国や地域の発展と平和に貢献する姿だ。母国では、日本と異なる社会の状況が壁となって立ちほだかり、日本留学経験の活用を阻むことも多いが、それでもくじけず母国で活躍する帰国留学生たちがいる。壁を越えさせる大きな力は、いつも留学生自身の強い意思だ。

実施から比較的年数のたった小規模な留学事業として、アジア・ユース・フェローシップ (Asian Youth Fellowship、AYF) というプログラムがある。AYF は、1996 年度から 2010 年度にかけて実施された国際交流基金の高等教育招聘奨学金事業で、ASEAN 諸国にバングラデシュを加えた 11 か国の奨学生に、マレーシアで約 1 年間、日本語能力検定 2 級レベルの日本語教育、受入れ研究室のマッチング等の予備教育を提供し、大使館推薦国費外国人留学生として日本の大学院へ送り出すプログラムである¹。帰国生は 15 期 254 名になる。

AYF 奨学生は日本留学の準備を十分にしたうえで渡日するのであるが、それでもいろいろな困難に遭遇した。彼らにとっての大きな困難は、主として日本の研究室活動にすぐに順応できないという研究上の問題であった。日本の研究室では、学生が教員の指示を黙って待つような教育は行われない。こと研究に関しては教員に食ってかかるくらいの学生が評価されるのだが、受動的な教育に慣れ、教員に質問することは失礼だと教えられてきた者にとって、研究ディスカッションで出されたコメントに対して自分の論を正々堂々とディフェンスするなどということは、とても勇気のいることだった。自分の論をロジカルに説明せず引き下がるアジアの留学生の態度は、指導教員にとっては研究能力の不足に見えた。

よりシンプルに、母国の基礎教育の低さが苦勞の種になることも多かった。それは本人の責ではないのだが、自分の努力で解決しなければならない課題だ。そのようなとき、日本留学で何かを掴もうという信念をもつ者であれば、誰のせいにもせずキャッチアップの努力をすることができる。ポテンシャルのある者は追いつける。留学初期に基礎数学の不足を強く指摘した指導教員が、後に「このような素晴らしい人材を受け入れることができ本当によかった」と言うほど、努力の成果が見られた事例もある。ポテンシャルは高いが教育歴のために能力が低いように見えるというのは今日もいろいろな場面で見られることであるが、現地における技術協力であっても留学受入れであっても、知識を投入し創造する力を引出すことが開発支援である。

¹ 第 11 期以降第 15 期で終了するまで、予備教育の場所は国際交流基金関西国際センターに移され、予備教育期間も 7 か月と短縮された。

研究上の問題は、指導教員の考え方による部分も大きい。博士号の授与については、日本の基準を完璧にクリアしなければならないとする考え方がある一方で、質が低くてよいわけでは決していないが、学位取得して帰国する意義や母国での将来の貢献を考慮すれば、この時点で授与してよいと判断する教員もいる。どちらと決すべきものでもないが、留学受入れの最終目的は必ずしも学術研究に寄与することだけではなく、その能力をつうじて多様に母国の発展に貢献することであると考えるならば、ケースバイケースで後者もあってよいのではないだろうか。

AYF の帰国生ではないが、学位取得して帰国する意義を示す事例がある。それは、スラバヤ工科大学において、研究室中心教育 (Lab Based Education、LBE) という日本型工学高等教育を導入することによって研究能力を強化するという、当時としては比較的斬新な技術協力プロジェクトを実施したときのことである。インドネシアでは西ジャワと東部インドネシア地域の格差が深刻な問題となっており、スラバヤ工科大学は情報技術分野における東部インドネシアの拠点大学として、プロジェクトの成果を地方部へ波及させる役割も担っていた。プロジェクトの直接のカウンターパートは当時の連携担当副学長で、日本で工学博士を取得された方だった。先生もご家族も流暢な日本語を話される。私は今もこの先生を尊敬してやまないが、そのお人柄だけがスラバヤ工科大学の強化に資したのではない。先生は、ご自身の日本留学経験による「日本の研究室は指導教員をトップに先輩後輩という人間関係でつなぐれ、24 時間研究している、これが LBE だ」という実践的な LBE 理解と、自学を日本の大学のような研究大学にしたいという強い意思をおもちだった。その意思が、激務を押して最大限の時間を割き、若手教員を先導する姿を作ったに違いない。日本で学位取得ならずして帰国されていたら、執行部として大学の研究能力強化をリードする役割を担うことはなかったであろう。

「日本の大学ではどこでもやっている研究というものが我が大学ではどうしてできないのか！」これは副学長が本当に悔しそうにおっしゃった言葉だ。幾度 LBE 導入の試みをして教員や学生がついてこないという経験は、母国の大学に復職した帰国生の多くが突き当たる壁である。その背景には、そもそも開発途上国の多くの大学では教員は「先生」であって研究者ではないという実態がある。まったく研究をしていないわけではなく、外部資金を得て研究をしている教員もいるのだが、企業のコンサルティングや調査請負のようなものも多く、国際的な学術雑誌論文を書けるような研究は極めて少ない。自分は授業を行う先生だと思っている教員は、研究をすることに対する報酬を期待することもある。なんとか研究をさせようとインセンティブマネーを出している大学もある。教員は研究をする、研究あつての教育という研究文化がないのである。

開発途上国ではその他にも、おしなべて教員の給与が低いいためアルバイトに忙しく、研究などしている暇がない、大学院生は社会人ばかりで夜の講義には来るが研究要員にならない、といった共通の事情もある。しかし、このような中でも、必ず研究をしようと努力している教員はいる。そのような教員が執行部になれば、グループでの読

書を奨励するなどして学内に研究文化を醸成しようとするだろう。副学長もこうした試みを重ねてこられ、無念の思いを募らせていた。この無念さと LBE 実践への確たる決意がなければ、スラバヤ工科大学が研究能力を強化し、東部インドネシアの地方大学強化に貢献することはできなかったかもしれない。スラバヤ工科大学は副学長の意思を後継者や若手教員に引き継がせながら、足かけ約 10 年かけて LBE を定着させた。その結果、研究論文数や発明特許申請数が大幅に増加している。近年は後発のカンボジアでも産業構造多角化に資する研究人材を作ろうとする動きがあり、スラバヤ工科大学はカンボジアの工科大学教員を受入れ、LBE 導入のコツを伝えている。

日本で学位をとったことの意義は、もう少し複雑な展開として現れることもある。インドネシア出身の AYF 留学生の一人は日本で工学博士号を取得、その後数年間のポスドクを終えて母国の大学に復職し、日本の大学での創造的な活動やスラバヤ工科大学が取り組む改革を取り入れよう努力したが、残念ながらその意義は大学幹部に理解されなかった。彼は、基礎教育の不足という壁を見事に超えて顕著な研究業績をあげた人物である。そのような強壮な意思の持ち主であっても、トップが保守的で周囲も新しいことを望まなければ、若手ひとりで頑張ることは、とくに地方部の大学では難しかったであろう。その地に家まで建てて奉職するつもりであった彼は、自分の専門とは異なる分野の日系企業の工場長に転職した。それは、日本で培った研究能力を学术界で発揮できないという点において、インドネシアにとって残念なことではあるが、そもそも高等教育機関は国の社会経済的発展に資することを求められている。学位取得者が象牙の塔に籠りがちな開発途上国で、彼は獲得した能力を活かすために民間セクターに飛び込んだのである。諦めて、授業をする先生を続けていたほうが楽だったかもしれない。彼が母国の労働文化を理解しつつ、日本の製造業の十八番である生産性向上に取り組み成果を上げたことは、日本での博士号取得者による母国への立派な貢献である。

日本とのギャップがより大きい後発国では壁が一層高いかということ、必ずしもそうではない。カンボジアでは 1990 年代後半、荒廃した社会のリハビリテーションのため、文化復興がひとつの喫緊の課題であった。その課題に応えるべく、アンコールワット修復専門家と文化芸術省の若手行政官が AYF に参加した。彼らが帰国して 20 年近くが経つ。修復専門家は、留学前から日本も支援する国際的な修復事業に参加しており、日本ではアンコール時代の陶磁器について科学的な研究を行った。理系の教育背景を持たなかった彼にとって、この研究はなかなか苦しいものであったが、彼のアンコールワット愛とでもいうべきものは非常に強く、留学中にも崩れなかった。修士号取得して帰国した後、彼にはアンコールワット修復の仕事が待っていた。その仕事の一環として遺跡保存に関する著書論文を執筆し、日本との共同修復事業に参加し、彼は着々と日本留学の成果を母国で花開かせていった。またカンボジアのみならず近隣地域の文化遺産保全への貢献も大きい。もちろん苦労はあったと思うが、相対的に壁は低かったのではないか。

他方、文化芸術省の行政官は、復職して大きな壁につきあたることになる。文系留学

の彼にとって日本での最大の困難は、予備教育時代に十分習得できなかった日本語であっただろうが、今も社会論議を端正な日本語のできるほど、彼は留学中に日本語能力を磨いた。そして修士号を取得して復職したものの、公務員の給与の低さやなくなる汚職等、自分の努力だけでは如何ともしがたい社会の状況が彼を取り囲んだ。一番高い壁だったのは、正しいことが必ずしも正しいと通らない社会の仕組みだったのではないだろうか。社会正義への信念をまげていたら壁はもっと低かったかもしれない。しかし彼は、家計のために公務の傍ら複数のアルバイトをする等の妥協はしながら、文化芸術省の官僚として社会に益する文化政策の推進に努め、また王立芸術大学の教員としてカンボジアで育つべき教育文化を論じ続けている。アンコールワット研究の権威である日本の指導教員との師弟関係も持続しており、広い人脈をベースに UNESCO のアジア太平洋地域の文化遺産保全に参加するといった貢献もある。

帰国した留学生の就職が大きな問題であるカンボジアで、このような活躍ができるのはむしろ恵まれたことではあるが、日本留学中にいっそう確信したであろう社会正義に向き合う姿勢を、彼は少しもなくしていない。カンボジアの社会がどうあるべきかを語らせたなら、言葉は止まらない。日本の社会を見てきた者として、母国の文化政策に関わる業務のなかで憤りを感じることは多いであろう。芸術文化に直接関わることではないが、こうした社会正義を追及しようとする意識が育つことは、カンボジア社会にとって非常に重要なことだ。その意味でも彼の母国への貢献はとても大きい。

留学生は、教育背景の違いを背負って日本人とともに日本水準の研究に取り組む。ようやく目標達成して帰国すると、今度は母国の社会にある壁に夢の実現を阻まれる。壁に押しつぶされて、日本留学の成果が母国の社会に届かないケースも少なからずあるだろうが、ここに紹介した人々は、強い意思と母国への想いによって志を貫いている。このような志高い帰国生たちが、共通の課題解決に手を組むことができれば、それは其々の国だけでなく地域全体の発展、ひいては社会の安定につながるだろう。日本留学帰国生への期待は大きい。